

---

# よしなしごと

くるすなたか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

よしなしこと

### 【Nコード】

N76650

### 【作者名】

くるすなたか

### 【あらすじ】

つれづれなるままに、日暮し、硯に向かひて、心にうつりゆくよしなし事をそこはかとなく書き綴った吉田兼好。

僕も、とある出来事がきっかけで、心にうつりゆくよしなし事をそこはかとなく書き綴り始めた。

## 十一月 1（前書き）

この小説は、事実に虚偽を織り交ぜた半フィクションストーリーである。

## 十一月 1

吉田兼好は心にうつくりゆくよしなし事を書き綴った。  
僕もそうしたいと思う。

ある日、僕、来須菜高は大阪府大東市の野崎というところにある  
中学校でいじめられていた。

前からいじめられていたが、最近相手も陰湿で、こちら鬱憤  
がたまっていた。そんな時、国語の時間。分割授業とかで気の弱い  
若手先生の方に回されていたのが運のツキだったのかもしれない。  
黒板に書かれたことをノートにうつす、うつさない以前にノート  
を取られてしまった。

最初は松口、という奴だった。

野球部ではレギュラーを張っていたが、悪ふざけが過ぎた。

ノートが彼の手に渡り、それを取りかえそうとしているうちにま  
た久木という奴にシャーペンをとられてしまった。結果的に神奈川  
や福村もかわっていた。

なんとか取り返し、その日の授業は終わった。

だが、最後に久木に取られたまま、久木は教室に帰った。

チャイムは鳴っていたので、挨拶を待たずして久木を追った。な  
くされては元も子もないからだ。

向こうでは久木は平然と座っていた。久木にノートの在り処を強  
い口調で聞いてみた。

「藤に渡した」軽々とした口調で答えた。

藤を睨むと、挑発するような動作をしながら「さあどこやるおか  
？」など言いながら、こちらを睨み返してきた。

腹を立てた。

気付くと、つかみあいの喧嘩になり、まわりに人だかりができて  
いたし、机の中の荷物は散乱していた。

力は五分五分だったからか、誰も止めようとしなかったが、喧嘩は中途半端に終わることになった。

喧嘩を終えて、ちらかった自分の机の荷物を直している時だったろうか。

須摩、という奴がいた。シニアリーグだかボーイズだかという本格的な野球チームに入っていて、力も抜群に強かった。途中で学校を堂々と抜けられる不良だったが、友達当りはよかったようだ。

僕は元々あまり好きではなかったが。

そいつが「こつちやし！」とか叫びながら、イスの下からノートを取り出した。

ちなみに彼が座っていたイス、すなわちノートを取り出したイスは藤のイスだった。

面倒くさいことはごめんだ、と思っているはずの割には怒りのあまり、僕は須磨に向かっていった。

ノートを取り返すことが目的だったが、彼はノートをどこかへ放り投げた。

個人的には「ふざけんな」と押したつもりだが、後から聞いた所ではつつかかってきた、と先生からの供述に答えているらしいので、怒りのあまりそうなったのかもしれない。

彼は中学に入ってから特に喧嘩早かった。

抜群な力で半開きのドアを蹴飛ばし、廊下にひきずりだされた。そこからはよく覚えていないが、彼も鬱憤がたまっていたのだろうか。後から聞いた話によると、思いつきの膝蹴りを五、六発受け、とどめの足蹴りで鼻血が噴出したそうだ。

唯一覚えているのは蹴られた時、脳内イメージは、まさに星が飛んだような画だった。

鼻血を床に、服につけながら、別府という保健委員に保健室に連れて行かれた。

途中に通るクラスの窓から、女子男子友達非友達問わず自分の顔を眺めていた。

「かわいそうに」の目だったのか、ただの物珍しさだったのか

.....

なんとなく、それだけかなり気になった。

保健の先生にビニール袋に入った氷水を渡され、十数分冷やしていると、チャイムが鳴ったが、精神的にも戻りたくは無かった。

先生は「病院に行かなしやあないな」と諭すように喋ったあと、職員室の電話から誰かへ電話をかけている。

先生に連れられるまま歩くと、地元のタクシーが「送迎」という名目で正面玄関へ来ていた。

電話は、タクシー会社へかけたのだろう、と脳内で解釈した。

タクシーに乗ると、先生は中学校から歩いていけないこともないくらいの距離にある大東でたぶん一番大きい病院の名前を告げ、運転手は「はい」と頷き、メーターを作動させた。

タクシーは国道を山と沿って走っていくとぶつかる高架を左にそれると、大学の前の交差点で右折する。やがて、四年ほど前に盲腸で入院したこともある大きい病院が見えている。

盲腸で入院した時はじめての「一人」であることあり、寂しくてヒマすぎて、なんといつてもお腹がすいた。

あまり、いい思い出があるとはいえない。

先生が受付を済まし、お年寄りしか座っていない内科の待合室の前に座って、呼ばれるのを待った。

「来須さ〜ん」

意外と早く呼ばれた。「内科 特別室」というところだった。

CTスキャンもしていなければ話もしていないが、あまりいい結果ではない気がした。

## 十一月 2（前書き）

この小説は、事実に虚偽を織り交ぜた半フィクションストーリーである。

## 十一月 2

「内科特別室」では、30代くらいの男の看護師と、40代後半くらいの医師が待ち構えていた。

「柔らかな医者っぽい口調で僕に聞いた。

少し考えたが、僕は絶対に正直言わないといけないと思った。これでただの喧嘩やプロレスごっこで済まされると、絶対にいいことは起きない、直感でそう感じていた。

それは直感ではなく、自分の正義感と、彼に対する嫌悪だったのかもしれない。

「……………けられました。膝で。」

「え？けられたの？」

その医者は、驚くともなし、同情するでもなし、こちらから見て何を考えているかわからない表情をしながら受け答えをしていた。

どういう状況で蹴られたか、鼻血の量、その怪我について本当のことを、正直に、全て話した。

「じゃあ、とりあえずCTスキャンで検査をしておきましょうか。」

何故かその医師が同行して案内されたのは、「CTスキャン1」と書かれた部屋の前だった。

保健の先生が持っている薄い黄色のクリアファイルをナースステーションのような所の看護師に渡していた。

「10分くらい待ち時間いただきますけど」と看護師は先生と自分に話しかけた。文章に書き表してみると、話が続くようなセリフだが、看護婦も、保健の先生も、自分も話を続けなかった。

「CTスキャン1」の前にあったのは、「喫茶 ほすびたる」と窓にシールが貼っている喫茶店だった。

「あつたかい餛飩・蕎麦はじめました」だとか「タマゴサンド 3

50円だとか書かれた紙がペタペタと窓中に貼ってあり、喫茶店の中の様子は殆ど見られなかったが、手前のおばさんがトーストに砂糖をふりかけていることだけは分かった。

盲腸で入院していた時、何も食えない状態でタマゴサンドのチラシを見つけていたら、発狂したかもしれない。

そんなどうでもいいことを考えれば、10分くらいの暇はつぶせるのではないか、と思ったが退屈な上、腹を立て、さらに不安な上での10分は30分にも、40分にも感じられた。

周りの話に聞き耳を立てたり、周りのものをやたら観察したりしてひまをつぶした。

「オペ明日やろ？」遠くから若い男の声が聞こえてきた。

「名古屋までやったら何？近鉄？新幹線？タクシー？」今度はそれに相応する年の女の声だった。

二人は誰も寝ていない移動式ベッドにもたれながら話していたが、三人目が奥からやってきた。同年代の男のようだ。

「新幹線が一番早いけど、金がかんで」

「経費で落ちるから新幹線でえっか。」女はなぜか落胆したような声で答えた。

何の話か気になったが、看護婦の若い声で名前を呼ばれたため、席を立てて「CTスキャン」に一人で入った。

待っていたのは片言のメガネをかけた医者だった。「李」という名字がちらりと名札から覗いた。

「ドコデケラレタンスカ？」CTスキャンの台に寝かされながら聞かれたので起き上がるうとしたが、口だけでいい、というジェスチャーをされたので寝ることにした。

枕らしき下に背骨置きらしき部分があつたが、そのせいでやけに窮屈だった。

「膝です」

「ヒザ？」ある程度の日本語は喋れるようだったから、膝がわから

ないことはないだろうとは思ったが、指の自分の膝の位置を差した。「アア、膝デスネ」今から思えば場所を聞いていたのかもしれない。

スキャンがはじまった。へ楽にしてくださいへ動かないでくださいへという女性の機械音が機械が発せられた。例の背骨置きで背骨が痛く、はじめてのＣＴスキャンだ。緊張するな、楽になれ、という方が不自然なのかもしれない。

しばらくすると、台は移動し、元の位置に戻された。

起き上がろうとしたが、奥で操作していた例の李さんが「オキアガラナイデイヨ」と強めの口調で言った。

李さんは奥にいたと思われる医者呼び、話をすると、二人は少しあわて始めたように見えた。

様子がおかしいな、と思い始めたところには、さつき名古屋に行く話をしていた男女がもたれていたようベッドに六人がかりで寝かされていた。李さんが「首ヲ特ニ気ヲ付ケテ」「ストレッチャー呼ンデ来テ」と他の五人に諭していた。

李さんが幾度も「半年カ一年クライ前に首ケガシマセンデシタカ？」と聞いていたのがひっかつた。

ベッドのまま運ばれた。医者独り言によると病室が空いていないのでとりあえず「点滴室」においておくそうだ。

点滴室では、李さんをはじめとする五人に首にコルセットのようなものを巻かれていた。真上しか見られず、窮屈にも程があった。

これから暇な時間がありそうなので一眠りすることにした。

起こされたのは、母が諸福でしているパートからかけつけてきた時だった。諸福からタクシーで駆けつけてきたと思ったが、バスで家まで戻り、マイカーで来たようだった。

母はコルセットを見て驚いていた。先生から蹴られた時の状況の話聞いた後、李さんから怪我の話聞いた。

母から伝え聞いた話だが、一年ほど前から骨折していて、自分は気付かずに生活していたらしい。

なんてこった。

だが、今回のでそれが悪化したらしい。

なんてこった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7665o/>

---

よしなしごと

2010年11月8日19時10分発行